

法人番号	131036
プロジェクト番号	S1101012

**平成23年度～平成27年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」  
研究成果報告書概要**

1 学校法人名 成城学園                      2 大学名 成城大学

3 研究組織名 成城大学グローバル研究センター

4 プロジェクト所在地 157-8511 東京都世田谷区成城6-1-20

5 研究プロジェクト名 社会的・文化的な複数性に基づく未来社会の構築に向けたグローバル研究拠点の形成

6 研究観点 研究拠点を形成する研究

7 研究代表者

研究代表者名	所属部局名	職名
上杉富之	グローバル研究センター	センター長

8 プロジェクト参加研究者数       名

9 該当審査区分     理工・情報             生物・医歯             人文・社会

10 研究プロジェクトに参加する主な研究者

研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの役割
上杉富之	文芸学部・教授	グローバル研究における社会接触の理論・方法論の検討	グローバル研究における社会接触の理論・方法論の構築
小澤正人	文芸学部・教授	東洋史研究における歴史認識	東洋史研究におけるグローバル研究の実践と理論化
東谷 護	文芸学部・教授	グローバル研究におけるコミュニティ再編の理論・方法論の検討	グローバル研究におけるコミュニティ再編の理論・方法論の構築
岩崎尚人	経済学部・教授	グローバル研究における経済社会動態の理論・方法論の検討	グローバル研究における経済社会動態の理論・方法論の構築
北山研二	文芸学部・教授	グローバル研究における文化表象の理論・方法論の検討	グローバル研究における文化表象の理論・方法論の構築
木畑洋一	法学部・教授	グローバル研究における歴史認識の理論・方法論の検討	グローバル研究における歴史認識の理論・方法論の構築
佃 陽子	法学部・専任講師	日系アメリカ人社会を通してみるアメリカの移民政策の変遷	社会接触に伴う移民政策の変遷の理論化

法人番号	131036
プロジェクト番号	S1101012

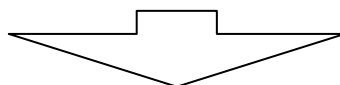
岩田一正	文芸学部・ 准教授	学校教育の改革にみるコミュニティの再編	教育改革を通じたコミュニティ再編の理論化
庄司匡宏	経済学部・ 准教授	低開発国経済発展の理論と可能性に関する経済社会動態	開発経済からみる経済社会動態の理論化
木下 誠	文芸学部・ 准教授	イギリス文学における植民地の表象	イギリス文学における植民地表象のグローバル性の理論化
外池 昇	文芸学部・ 教授	日本近代史研究における歴史認識	日本近代史研究におけるグローバル研究の実践と理論化
(共同研究機関等)			

<研究者の変更状況(研究代表者を含む)>

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
	名古屋大学大学院環境学研究科社会環境学・教授	西原和久	
	Massachusetts Institute of Technology, Assistant Professor	永原 宣	

(変更の時期:平成24年7月1日)



新

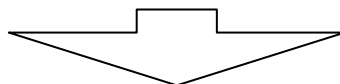
変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
名古屋大学大学院環境学研究科社会環境学・教授	社会イノベーション学部・教授	西原和久	社会接触に伴うトランスナショナル空間の成立と展開に関する理論的研究
Massachusetts Institute of Technology, Assistant Professor	Massachusetts Institute of Technology, Assistant Professor	永原 宣	文化創造(ポピュラーミュージック)を通じたコミュニティ再編の理論化

法人番号	131036
プロジェクト番号	S1101012

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
	中京大学現代社会学部・教授	川田牧人	
	成城大学社会イノベーション学部・教授	Dennis Riches	

(変更の時期:平成25年4月1日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
中京大学現代社会学部・教授	成城大学文芸学部・教授	川田牧人	フィリピンのフォークカトリシズムに見るグローバリズムとローカリズムの相互作用に関する研究
成城大学社会イノベーション学部・教授	成城大学社会イノベーション学部・教授	Dennis Riches	英語学習・教育に見るグローバリズムとローカリズムのインターフェイスに関する研究

## 11 研究の概要(※ 項目全体を10枚以内で作成)

## (1)研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

## &lt;目的・意義&gt;

本プロジェクトは、1) グローバル化とローカル化が同時かつ相互に影響を及ぼしつつ進行するという社会的・文化的な諸現象に焦点を当てた新たな研究を「グローバル研究」として構想・確立し、2) グローバル研究を理論と実証の両面から推進することを通して、従来の研究で見過ごされてきた様々な現象を「対象化」(可視化)するとともに、3) グローバル化に不可避と見なされてきた「中心」と「周縁」の間の社会的・文化的な力の不均衡を「対称化」(均衡化)する可能性を探り、最終的には、4) 多様な人々の生き方や価値観、社会制度の共存を容認する「複数性社会」を構想し、その実現に向けた理論を構築することを主要な目的とする。

本研究プロジェクトは、世界的に見てもきわめて独創的な「グローバル研究」を構築し、理論と実証の両面から強力に推進して人文・社会科学に新たな研究分野を開拓、確立するという意味できわめて重要な意義を持つ。また、近代的知識や制度の矛盾や機能不全が顕在化しその再編や再構築が強く求められている現在、グローバル研究の成果に基づいて未来社会を「複数性社会」として構想、提示しようとする試みは、広く一般社会への貢献をも目指すものとして高く評価される。

## &lt;計画の概要&gt;

(体制) (詳細は「(2) 研究組織」参照)

本プロジェクトはグローバル研究センターを拠点として実施する。センター内に「研究資料室」を新設し、情報や資料を一括して収集・蓄積・管理するとともに、成果の公表や発信を行う。研究に当たっては、プロジェクトを「理論研究」(1テーマ)と「実

法人番号	131036
プロジェクト番号	S1101012

証研究」(5テーマ)に大きく二分し、各研究テーマを6～8名から成る研究チームが分担する。各研究チームは個別に研究を進め、各年度末に全研究チーム、研究メンバーが研究成果を持ち寄ってシンポジウム等を開催し、相互に評価を下すとともに理論的な検討を加える。必要に応じて若手研究者をリサーチ・アシスタント等として採用し、研究グループの支援に当たらせる。プロジェクトの達成度や研究成果は、学内の研究機構(運営委員会)とともに、学外の研究者を招いてセンターに新たに設置する「研究総括班」が評価する。

#### (年次計画)

- ◆平成23年度:「研究資料室」の新設、研究拠点としてのグローバル研究センターの整備・拡充。プレ・シンポジウム(プロジェクト全体及び各グループの研究計画の確認等)とワークショップ開催(経過発表と相互検討。翌年度の計画策定)。研究チームごとの個別の調査・研究の開始。
- ◆平成24年度:拠点のさらなる整備・拡充。各研究チームの個別の調査・研究の継続。ワークショップ開催(経過報告と相互検討)。
- ◆平成25年度:拠点の整備・拡充。各研究チームの個別の調査・研究の継続。ワークショップ開催(中間評価に伴う研究進捗状況報告と相互検討)。プロジェクト全体の「中間評価に伴う研究進捗状況」の作成・提出。
- ◆平成26年度:拠点の整備・拡充。各研究チームの個別の調査・研究の継続。ワークショップ開催(経過報告と相互検討。「研究成果報告書」の作成に向けた研究成果の予備的なまとめ)。
- ◆平成27年度:各グループの補充調査・研究の実施。プロジェクト全体に関する公開シンポジウム開催(最終的な成果報告。理論の提示と相互検討)。研究成果の取りまとめと「研究成果報告書」の作成・提出。

#### (2)研究組織

本研究プロジェクトを円滑かつ効果的に実施するため、当初の計画に基づいて、平成23年6月、それまで民俗学研究所の下にあったグローバル研究センターを、新しい研究母体である成城大学研究機構の下に置いた。研究機構は本学の研究の発展に資するため、研究戦略委員会の策定した基本戦略の下、研究支援及び当該研究機構が所管する研究センターの総合的な管理及び運営に関する支援等を行うことを目的とする。

研究代表者(上杉富之グローバル研究センター長)は、研究プロジェクト全体の運営方針を策定するとともにプロジェクトの実施を統括し、学内外の諸部署・諸機関等との対外的な折衝を行う。

学内32名、学外8名からなる本研究プロジェクトは、研究調査班として「理論研究」(1テーマ)に「グローバル研究と複数性社会構築の理論研究」を据え、「実証研究」(5テーマ)に①社会接触のグローバル研究、②コミュニティ再編のグローバル研究、③経済社会動態のグローバル研究、④文化表象のグローバル研究、⑤歴史認識のグローバル研究を配置した。各研究チームにはリーダー、サブリーダーを置き、チーム内の連携を図り、チーム間の連携は、リーダー・サブリーダー会議やすべての研究員が参加する研究員会議等により図られる。

本研究プロジェクトを統括する研究代表者は、研究プロジェクト全体に関して最終的な責任を負い、上記研究機構に設置する運営委員会を通して各研究チームの研究方針や進捗状況について指導する。個別の研究チームについてはリーダーが責任を持ち、研究代表者との間の連絡・調整を行い、個別の調査研究については各研究分担者が責任を負うものとする。

法人番号	131036
プロジェクト番号	S1101012

PDは平成 24 年度から採用（1 名）し、歴史認識のグローバル研究チームに所属させ、研究に従事させている。RAは年度により 3 から 4 名を採用し、シンポジウム運営業務、刊行物の編集等、グローバル研究の側面からの支援にあわせている。大学院生については研究資料室における資料収集・整理等の業務を委託している。

### (3) 研究施設・設備等

1) 研究施設の面積・使用者数：面積 38 m<sup>2</sup>、使用者数 45 名。

他に研究機構事務室 62, 28 m<sup>2</sup>を適宜使用。

2) 主な研究設備・利用時間

- ・コンピュータ デスクトップ 2 セット、週 40 時間
- ・PC 5 台 随時使用（調査研究、シンポジウム、刊行物の編集等）
- ・コピー機（スキャナ機能付き） 1 台 週 40 時間。
- ・ビデオカメラ 2 台。随時使用（調査研究、シンポジウム等）
- ・カメラ 2 台。随時使用（調査研究、シンポジウム等）
- ・ヴォイスレコーダー 4 台。随時使用（調査研究、シンポジウム等）

### (4) 研究成果の概要 ※下記、13及び14に対応する成果には下線及び\*を付すこと。

#### 1. 目標の達成

本研究プロジェクト、「社会的・文化的な複数性に基づく未来社会の構築に向けたグローバル研究拠点の形成」は、1) グローバル化とローカル化が同時かつ相互に影響を及ぼしつつ進行するという社会的・文化的な諸現象（グローバル化）に焦点を当てた新たな研究を「グローバル研究」として構想・確立し、2) グローバル研究を理論と実証の両面から推進することを通して、従来の研究で見過ごされてきた様々な現象を「対象化」（可視化）するとともに、3) グローバル化に不可避と見なされてきた「中心」と「周縁」の間の社会的・文化的な力の不均衡を「対称化」（均衡化）する可能性を探り、最終的には、4) 多様な人々の生き方や価値観、社会制度の共存を容認する「複数性社会」を構想し、その実現に向けた理論を構築することを主要な目的とする。

以上の目的をより効果的に達成するために、本研究プロジェクトでは、民俗学研究所の下で平成 20 年に新設したグローバル研究拠点としてのグローバル研究センター（Center for Glocal Studies: CGS）を本学研究機構の下ではあるが独立させた。その上で、本研究プロジェクトを、当初の計画通り、6つの研究テーマ（1つは理論的研究、残りの5つは実証的研究に力点を置く研究テーマ）に分け、6つの研究テーマチームが同時並行的に調査研究を実施することとした。そして、これら 6つの研究テーマチームが得た研究成果を、研究分担者全員が参加する全体討議の場（シンポジウムやワークショップ等）に持ち寄って総合的かつ多面的に検討し、より包括的な理論の構築を試みた。本研究プロジェクトの研究成果の一部はすでに各研究分担者が口頭や学術論文等として個別に発表するとともに、各研究テーマチームがそれぞれの研究テーマに従って編集、刊行した 5 冊の研究叢書としても公表している。後述する、「3. 研究成果の公表」をご覧ください。明らかなように、本研究プロジェクトは多大なる成果を産み出しており、当初の目標・目的をかなりの程度に達成したものと自負する。

以下、本報告では、まず、そうした調査研究手順を経て最終的に得られつつある「研究プロジェクト全体の研究成果の概要」を述べる。その上で、そうした最終的な研究成果を得るための基礎的研究となった6つの研究テーマの研究成果を個別に記す。

法人番号	131036
プロジェクト番号	S1101012

## 2. 研究プロジェクト全体の研究成果の概要

本研究プロジェクトの一つ目の目的、すなわち、「グローバル化とローカル化が同時かつ相互に影響を及ぼしつつ進行するという社会的・文化的な諸現象（グローバル化）に焦点を当てた新たな研究を「グローバル研究」として構想・確立」という点については、グローバル研究センターの民俗学研究所からの分離・独立（2011年4月）と、グローバル研究に焦点を当てた学術雑誌、『グローバル研究』（*Journal of Glocal Studies*）の創刊（2014年3月、創刊号刊行）とその継続刊行をもってして一応達成されたものとする。本研究プロジェクトの研究代表（上杉富之グローバル研究センター長）は、『グローバル研究』の創刊号の巻頭論文にて改めて「グローバル研究」（glocal studies）の構想を提示するとともにその目的や可能性を論じている（\*16 東谷護他（編））。上杉はまた「グローバル研究」の観点から、国際人類学民族学連合（IUAES: International Union of Anthropological and Ethnological Sciences）の国際会議（2014年5月15日、幕張メッセにて開催）で、*The Perspective of Glocalization: Addressing the changing Society and Culture under Globalization*と題する分科会を企画・運営した（*The Perspective of Glocalization: Addressing the changing Society and Culture under Globalization*と題してグローバル研究センターより2016年に刊行 \*7 Tomiyuki Uesugi and Matori Yamamoto）。また、AJJ（Anthropology of Japan in Japan）学会の2015年春季大会を、*Glocalizing Japanese Studies: Connecting Japanese Studies In- and Out-of-Japan*を大会テーマとして開催した（2015年4月25～26日、成城大学にて開催）。さらに、本研究プロジェクト、「社会接触のグローバル研究」チームに属する研究分担者の矢澤（修次郎）と西原（和久）は、2015年5月29-31日、国際社会科学団体連盟（International Federation of Social Science Organizations: IFSSO）の会議を *Glocalization: A Social Design for the Creation of Multicultural Society*と題して成城大学にて開催した。これらの試みを通して、「グローバル研究」、ないし少なくとも「グローバル化」を焦点とする研究は日本のみならず国際的にもじょじょに浸透しつつあるものと自負する。

二つ目の目的、「グローバル研究を理論と実証の両面から推進することを通して、従来の研究で見過ごされてきた様々な現象を「対象化」（可視化）」するという点については、本研究プロジェクトを構成する6つの研究テーマチームに属する各研究分担者がそれぞれの分担役割に応じて調査研究を実施し、その研究成果は個別の口頭発表や学術雑誌論文等として随時公表している（個々の研究プロジェクトおよび研究分担者の研究成果については、後述の「2」テーマごとの研究成果の概要）を参照）。研究テーマチームごとの研究成果はまとめて、グローバル研究センターの研究叢書やワーキングペーパー、報告書等としても刊行されている（既刊：研究叢書5冊 [\*1 上杉富之（編）、\*2 岩田一正・阿部勘一（編）、\*3 岩崎尚人（編）、\*4 北山研二（編）、\*5 小澤正人（編）]、英文研究叢書2冊 [\*6 Tomiyuki Uesugi and Matori Yamamoto、\*16 Michael Kuhn and Shujiro Yazawa]、ワーキングペーパー5冊 [\*7 川田牧人他、\*9 Wesley Ueunten、\*12 ポール・フレデリクソン、\*18 北山研二（編）、\*17 庄司匡宏（編）]、シンポジウム報告書4冊 [\*13 境新一（編）、\*14 東谷護（編）、\*22 東谷護（編）、\*23 東谷護（編）]、欧米文リポート5冊 [\*10 北山研二・木下誠・松川祐子（編）、\*20 Dennis Riches、\*21 Jesús Arroyo、\*24 Dane Kennedy、\*25 Gergana R. Petkova]）。

法人番号	131036
プロジェクト番号	S1101012

三つ目の目的、「グローバル化に不可避と見なされてきた「中心」と「周縁」の間の社会的・文化的な力の不均衡を「対称化」(均衡化)する可能性を探る」については、明示的か否かは別にして、すべての研究テーマチームの全研究分担者が何らかの形で論じており、その意味では、すべての研究分担者が試みたと言って良い。その中でも特に明示的にこの問題を論じているのは、研究テーマ1、「社会接触のグローバル研究」チームの矢澤らである。矢澤らは、欧米先進国発祥の人文・社会科学が非欧米の発展途上国において圧倒的な力(ヘゲモニー)を持って君臨している現実を明確にした上で、そうした力にいかに対抗するかを多角的に論じている(\*16 Michael Kuhn and Shujiro Yazawa)。そして、そうした「中心」と「周縁」の力の不均衡を是正する一つの試みとして、矢澤らはアジアの社会学者を中心として、アジアが直面する諸問題を出発点として社会学を再構築することを提唱し、実際にそうした構想に基づく議論を論文集として編集、刊行しつつあることを紹介している(\*1 上杉富之(編))。矢澤のごとく明示的ではないにせよ、本プロジェクトに参加しているすべての研究分担者がグローバル研究という研究枠組みの中で、グローバル化の浸透、進行にともなうローカル化ないし「周縁」の事象や現象に焦点を当てていること自体がグローバル化における「中心」と「周縁」の力の不均衡の是正の試みであり、その試みは本研究プロジェクトを通して十分に評価に値する成果をもたらしたと確信する。

そして最終的な目的として掲げていた、四つ目の目的、「多様な人々の生き方や価値観、社会制度の共存を容認する『複数性社会』を構想し、その実現に向けた理論を構築」という点については、きわめて挑戦的で困難な試みではあるが、一部の研究分担者は粘り強く検討を進めている。例えば、上杉(\*1 上杉富之(編))は、その種の試みとして、グローバル化に賛成か反対かというような不毛な二者択一的な議論を超えた「第三の道」、オルター・グローバリゼーション(「もう一つのグローバル化」)の議論に注目している。オルター・グローバリゼーションの議論は、グローバル化とローカル化が同時に進行し相互に影響を及ぼすという現実、すなわち厳然たるローカル化を受け止めた上で、より望ましいローカル化(グローバル化)の可能性を探ろうとするものである。オルター・グローバリゼーションの議論はグローバル化を完全に拒否、排除しようとするのではなく、グローバル化する要素のなかで必要不可欠ないし望ましいものは受容し、望ましくないものは除去したり修正して「飼い馴らす」という考え方である。スローフード運動やフェアトレード運動、地産地消運動等がこの種の運動として挙げられる。オルター・グローバリゼーションの議論は、理論や方法の点で「グローバル研究」とはやや異なるが、「多様な人々の生き方や価値観、社会制度の共存を容認する『複数性社会』を構想し、その実現に向けた理論を構築」しようとしている点では同一の指向を持っているものであり、ローカル研究の可能性を示唆するものである。

以上のごとく、本研究プロジェクトは当初の計画通り進み、従ってまた、当初の目標を十二分に達成するのみならず、想定以上の多大なる研究成果をもたらしつつあると確信する。

### 3. 現在までの進捗状況及び達成度

#### <平成 23 年度 (2011 年度) >

平成 23 年度 (2011 年度) は、当初の計画通り、グローバル研究センターを独立させるとともに「研究資料室」を新設し、拠点としてのグローバル研究センターを整備・拡

法人番号	131036
プロジェクト番号	S1101012

充した。また、プロジェクト内の各研究チーム、各研究メンバーが個別の調査・研究を開始するとともに、年度初めには、プロジェクト全体の研究計画の確認をするためのプレ・シンポジウムを、年度末には、経過の報告や成果の比較検討、次年度の計画の確認等を行うためのワークショップ等を開催した。その結果、プロジェクト全体あるいは各研究チームがシンポジウム 1 回（\*59 【シンポジウム】永原宣他）、セミナー 1 回（英語）、ワークショップ 4 回、講演会 4 回（内 1 回は英語）、研究会 2 回、公開授業 1 回（英語）を開催し、また、研究メンバーの個別の研究成果発表とは別に、グローバル研究センターから、CGS Reports No1（\*26 Gergana R. Petkova、英語、一部ブルガリア語）、ワーキングペーパー（\*25 東谷護（編））を刊行した。以上のことから、本研究プロジェクトを開始した平成 23 年度（2011 年度）は当初の計画通りに本研究プロジェクトを進め得たと考える。

#### <平成 24 年度（2012 年度）>

平成 24 年度（2012 年度）も、当初の計画通り、グローバル研究センターをさらに整備・拡充するとともに、各研究チーム、各研究メンバーが個別の調査・研究を継続した。また、前年度同様、各研究チームの経過報告と相互検討、及び次年度の計画の確認をするために、年度初めと年度末にワークショップやシンポジウムを開催した。その結果、プロジェクト全体あるいは各研究チームがシンポジウム 5 回（\*36 【International Thinkshop】 Organizer: Calouste Gulbenkian、\*39 【シンポジウム】高木昌史、\*41 【シンポジウム】庄司匡宏、\*43 【公開シンポジウム】境新一内 1 回は国際シンポジウム）や国際セミナー 1 回、講演会 4 回（内 2 回は英語、1 回はスペイン語）、研究会 3 回を開催（主催、共催、後援）し、また、研究メンバーの個別の研究成果発表とは別に、グローバル研究センターからシンポジウム報告書 1 冊（\*23 東谷護（編））、CGS Reports（\*24 Dane Kennedy）、ワーキングペーパー（\*17 庄司匡宏（編））を刊行した。以上のことから、平成 24 年度（2012 年度）は当初の計画以上に本研究プロジェクトを進め、多大な成果を得たと考える。

#### <平成 25 年度（2013 年度）>

平成 25 年度（2013 年度）も引き続き、当初の計画通り、各研究チーム、各研究メンバーが個別の調査・研究を継続している。また、前年度同様、各研究チームの計画を確認するために、年度初めに集会（グローバル研究センター研究員会議）を開催した。平成 25 年度（2013 年度）は、本研究プロジェクト全体あるいは各研究チームとして、シンポジウム 3 回（\*29 【シンポジウム】岩崎尚人他、\*30 【シンポジウム】Dominique Chateau（内 1 回は英語）、\*33 【シンポジウム】陳培豊他）、国際研究集会 2 回（\*25 【国際研究集会】 Organizer: Center for Glocal Studies (CGS)、\*31 【国際研究集会】 Sponsor: Center for Glocal Studies (CGS)、すべて英語）、講演会 4 回（すべて英語）、研究会 2 回（うち 1 回は英語）を開催（主催、共催、後援）した。また、研究成果の一部を公表するものとして、シンポジウム報告書 1 冊（\*22 東谷護（編））及びリポート 1 冊（\*21 Jesús Arroyo、スペイン語）、ワーキングペーパー 2 冊（\*18 北山研二（編）、\*20 Dennis Riches）を刊行した。さらに、グローバル研究に関する学術雑誌として『グローバル研究』（*Journal of Glocal Studies*）を創刊した（\*15 東谷護他（編））。以上のことから、平成 25 年度（2013 年度）も当初の想定以上の研究成果を挙げ得たと考える。

#### <平成 26 年度（2014 年度）>

平成 26 年度（2014 年度）も引き続き、当初の計画通り、各研究チーム、各研究メンバーが個別の調査・研究を継続した。また、前年度同様、各研究チームの計画を確認するために、年度初めに集会（グローバル研究センター研究員会議）を開催した。平成 26 年度（2014 年度）は、本研究プロジェクト全体あるいは各研究チームとして、シン



法人番号	131036
プロジェクト番号	S1101012

ポジウム 1 回 (英語 \*15【Thinkshop】Organizer: World Social Sciences and Humanities Network)、講演会 4 回 (すべて英語)、ワークショップ 2 回 (ともに英語)、研究会 5 回 (うち 1 回は英語) を開催 (主催、共催、後援) した。また、研究成果の一部を公表するものとして、シンポジウム報告書 2 冊 (\*13 境新一 (編)、\*14 東谷護 (編)) 及びリポーツ 1 冊 (\*10 北山研二・木下誠・松川祐子、英文)、ワーキングペーパー 1 冊 (\*12 ポール・フレデリクソン 和文、英語対訳付) を刊行した。また、前年度に創刊した学術雑誌『グローバル研究』の第 2 号 (\*11 東谷護他) も刊行した。以上のことから、平成 26 年度 (2014 年度) も当初の予定通り順調に研究が進展したと考える。

#### <平成 27 年度 (2015 年度) >

平成 27 年度 (2015 年度) は本研究プロジェクトの最終年度であったため、当初の計画通り、各研究チーム、各研究メンバーが個別の調査・研究を継続するとともに、全体研究集会を開催して研究プロジェクト全体の研究成果を確認し、その後、研究チームごとの研究成果を研究叢書としてまとめて刊行した (\*1 上杉富之 (編)、\*2 岩田一正・阿部勘一 (編)、\*3 岩崎尚人 (編)、\*4 北山研二編 (編)、\*5 小澤正人 (編))。また本研究プロジェクト全体あるいは各研究チームとして、2 つの学術団体の 3 つの学会 (\*2【学会】(AJJ) Anthropology of Japan in Japan、\*4【学会】IFSSO) を共催ないし後援し、さらにシンポジウム 1 回、講演会 2 回 (うち 1 回は英語、1 回は中国語)、研究会 5 回も開催 (主催、共催、後援) した。さらに、英文のグローバル研究叢書 1 冊 (\*6 Tomiyuki Uesugi and Matori Yamamoto)、ワーキングペーパー 1 冊 (\*7 川田牧人他、及び、学術雑誌『グローバル研究』3 号 (\*8 東谷護他 (編)) も刊行した。以上のことから、平成 27 年度 (2015 年度) は、本研究プロジェクトの有終の美を飾り、また、次年度以降の新たな研究プロジェクトにつながるに足る多大なる研究成果を産みだしたものと考えられる。

#### <優れた成果があがった点>

以下の 5 つの研究ないし活動が質的・量的に特に優れた研究成果を挙げ得たと考える。

##### 1) グローカル研究、人文社会科学の理論と方法の再検討

テーマ研究 1 の「グローバル研究と複数性社会構築の理論研究」チームの検討に加え、がグローバル研究や人文社会科学の理論と方法の再検討矢澤修次郎らが企画したシンポジウム、International Thinkshop: Theories about and Strategies against Hegemonic Social Sciences (成果の一部は同名の英文研究叢書として既刊) では、日本やドイツの他、中国や韓国、フィリピン、コートジボアール、メキシコ等の研究者が社会科学全般における欧米と非欧米の間の力の不均衡とそれを克服するための戦略を正面から論じた。一方、高木昌史が企画したシンポジウム、「柳田國男没後 50 周年記念シンポジウム 国際化の中の柳田國男 『遠野物語』—以前／以後—」(成果の一部は『現代思想』掲載論文として既刊) 及びその他の論文) では、日本民俗学を確立した柳田國男の知的営為を国際化 (グローバル化) とナショナル化 (ローカル化) の相互作用の中で捉えようとする新たな試みであった。以上の 2 つの試みは、グローバル研究、さらには人文社会科学一般の理論と方法を再検討するきわめて意欲的かつ斬新な研究である。

##### 2) 日本内外におけるグローバル研究の普及、拡大、定着

上杉富之グローバル研究センター長並びに西原和久成城大学教授・矢澤修次郎成

法人番号	131036
プロジェクト番号	S1101012

城大学名誉教授らはそれぞれ、国際人類学民族学連合 (IUAES: International Union of Anthropological and Ethnological Sciences) の分科会や AJJ 学会 (Anthropology of Japan in Japan \*2 【学会】 (AJJ) Anthropology of Japan in Japan)、国際社会科学団体連盟 (International Federation of Social Science Organizations: IFSSO \*4 【学会】 IFSSO,) の研究大会をグローバル (化) ないしグローバル研究をテーマとして企画、開催するなどし、「グローバル研究」の理論と方法を国際的な場で集中的に議論する場を提供した。そうした地道な努力を通して、グローバル研究は日本のみならず国際的にも普及、拡大して認知され、定着されるようになりつつある (IUAES 分科会での発表は、\*6 Tomiyuki Uesugi and Matori Yamamoto の論文集としてすでに刊行)。また、グローバル研究及びそれに関連した研究の成果を公表する学術的な場として、グローバル研究センターでは、学術雑誌、『グローバル研究』 (*Journal of Glocal Studies*) を 2014 年 3 月に創刊し、毎年 1 号の割合で継続的に刊行している (\*8 東谷護他 (編)、\*11 東谷護他 (編)、\*15 東谷護他 (編))。以上の研究ないし研究活動は、本研究プロジェクトで推進しているグローバル研究を理論的、方法論的により洗練するとともに、世界的にみてもきわめてユニークなグローバル研究を日本内外に普及、拡大、認知、定着させるものとして高く評価されている。

### 3) 日本のポピュラー音楽に関するグローバル研究

東谷護成城大学教授を中心に、これまであまり学問の対象とされてこなかった日本のポピュラー音楽を俎上に載せ、しかも、それをグローバル化 (この場合は特にアメリカ音楽の「輸入」とローカル化 (この場合は日本独自のポピュラー音楽への変容) の相互作用の観点から記述、分析しようとする研究が進められている。その一環として、すでに 3 度のシンポジウムが開催され (「日本のポピュラー音楽をどうとらえるか」、平成 24 年度 [2012 年度]: 「日本のポピュラー音楽をどうとらえるか 2」、平成 25 年度 [2013 年度]: 「日本のポピュラー音楽をどうとらえるか 3」 \*33 【シンポジウム】 陳培豊、\*47 【シンポジウム】 東谷護、\*59 【シンポジウム】 永原宣) として開催され、それらの成果は同名の 3 冊の報告書 (\*14 東谷護 (編)、\*22 東谷護 (編)、\*23 東谷護 (編)) としてすでに刊行されている。本研究は、日本のポピュラー音楽研究に新たなフィールドを開拓するものとして高く評価されている。

### 4) ソーシャル・ビジネスに関するグローバル研究

庄司匡宏を中心に、近年、特に成長の著しいソーシャル・ビジネスに関するグローバル研究が進められている。平成 23 年度 [2011 年度] にはワークショップ、「グローバル社会の変動に関する経済学的接近」を開催し (\*60 【ワークショップ】 庄司匡宏)、援助されるローカルの側 (バングラデシュ) からソーシャル・ビジネスの意味と意義を再検討した (成果の一部は \*19 庄司匡宏 (編) として刊行)。また、平成 24 年度 [2012 年度] に開催したシンポジウム、「ソーシャル・ビジネスは東北被災地に何をもちたらずか?—バングラデシュを事例としたグローバル研究からの考察—」 (\*41 【シンポジウム】 庄司匡宏) では、ソーシャル・ビジネスモデルを東日本震災後の復興事業へ拡大適用する可能性を検討している (成果の一部は \*17 庄司匡宏 (編) として刊行)。本研究は、グローバル研究を通してソーシャル・ビジネス研究に新たな可能性をもちたらしつつあるという点で、特筆に値するものと考えられる。

### 5) 文化表象に関するグローバル研究

北山研二成城大学教授をリーダーとする「文化表象のグローバル研究」チームでは、欧米や日本の文学、芸術、美術作品等に見られるグローバル化とローカル化の相互作用

法人番号	131036
プロジェクト番号	S1101012

の諸相の研究を精力的かつ集中的に進めている（平成 23 年度 [2011 年度] 以来、講演会を 4 回、研究会を 4 回開催。成果は\*4 北山研二編(編)、\*18 北山研二(編)として刊行)。本研究は、グローバル化をキーワードとして、これまで個別に行われる傾向にあった文学、芸術、美術作品のグローバル化とローカル化の相互作用の研究を総合的かつ集約的に行っているという点で、今後の進展が大いに期待される。

### <問題となった点>

(問題点)本研究プロジェクトでは、実際に研究を進めるに当たり、社会的・文化的グローバル化の諸相を「社会接触」と「コミュニティ再編」、「経済社会動態」、「文化表象」、「歴史認識」の 5 つの側面（研究テーマ）に分け、それぞれの側面を別個の研究チームが進めるという方法を取っている。この方法は、個々の側面の研究を深め得るという点では効果的であるが、ややもすると相互の連携や協力が疎かになり、総花的な研究に陥るという問題点を持つ。

(克服方法)本研究プロジェクトでは、各年度の年度初め及び年度末に、プロジェクトを構成するすべての研究チーム、研究メンバーが集まってプロジェクト会議ないしそれに代わるシンポジウム、研究会等を開催して、各研究チームの間の相互連携・協力を図ってきた。今後は、それとともに、各研究チームのチームリーダー及びサブリーダーを集めたプロジェクト会議を適宜開催して計画の進捗状況を確認したり問題点、課題を共有するなど、より緊密な連携、協力体制を確立するものとした。

### <自己評価の実施結果と対応状況>

#### ①実施結果

本事業の主体であるグローバル研究センターでは、全センター研究員が参加する「センター研究員会議」が設置されている。各年度のセンターの事業はこのセンター研究員会議に報告され、自己評価を受けることになっている。本事業もこの対象となっており、研究の進展状況、予算、事業計画などについて、報告し、評価を受けている。

また本学には学長を委員長とする自己点検評価委員会が設置されており、グローバル研究センターも自己点検評価の対象となっている。本学では 2015 年度に大学基準協会の点検評価を受けることとなり、全学的な自己点検評価が行われ、本センターもその対象となり、自己点検報告書を作成した。

#### ② 対応状況

自己評価で問題点として指摘されたものについては、適宜対応を図っている。また大学の自己点検においては、特段の問題点は指摘されなかった。

### <外部(第三者)評価の実施結果と対応状況>

#### ①実施結果

本事業の主体であるグローバル研究センターが所属する成城大学研究機構には、学外の企業の役員、行政機関及び各種団体の関係者、他の研究教育機関の研究者等から選任され、学長により委嘱される外部アドバイザー制度が設けられている。この外部アドバイザーは、研究機構の活動及び運営に助言及び評価を与える役割を担うものであり、グローバル研究センターもその対象であり、そのなかには本事業も含まれる。この評価を受けるため、グローバル研究センターでは年度ごとに報告書を作成し、提出をしている。

また本学では 2015 年度に大学基準協会の点検評価を受けることとなり、全学的な自己点検評価が行われ、本センターもその対象となり、自己点検報告書を作成し、大学基

法人番号	131036
プロジェクト番号	S1101012

準協会の評価を受けた。

② 対応状況

外部アドバイザーから指摘された問題点については、随時対応し、是正に努めている。また大学基準協会からは、特段の指摘を受けなかった。

＜研究期間終了後の展望＞

平成 23 年度(2011 年度)に開始以来、本研究プロジェクトは順調に進み多大な研究成果を挙げつつあることから、研究機関終了後も基本的には「グローバル研究」を継続、発展させる。今後は、グローバル研究拠点としてのグローバル研究センターをさらに充実させ、国内のみならず海外で同様の研究に取り組んでいるないし取り組もうとしている大学や研究機関等と協力、連携し、文字通りの意味で国際的かつ学際的(超領域的)なグローバル研究を推進する予定である。具体的な研究プロジェクトとしては、以下のような計画を立案しつつある。

i) 次期研究プロジェクト名:

「グローバル研究の理論と方法を用いた社会・文化変動の超領域的、包括的研究」

ii) 研究プロジェクト期間:

平成 28(2016)年度～平成 32(2020)年度(5 年間)

iii) 目的及び意義:

本研究は、グローバル化がますます広範かつ深く浸透しつつある今日にあって、急激かつ急速に変化しつつある私たちの社会と文化の変動の現状並びに将来像を、成城大学で独自のものとして生まれ、成城大学で強力に推進している「グローバル研究」の理論と方法を用い、さまざまな専門領域や分野をまたがるとともに(超領域的)、対象の総体ないし全体像を視野に入れる包括的な観点から研究することを主要な目的とする。また、そうした研究を通して、混迷する今日の社会にあって、人びとの多様な存在の仕方や生き方を容認するような「複数性社会」を構想し、その実現に向けた理論や方法を模索することを試みる。

＜研究成果の副次的効果＞

少なくとも以下の 7 つの点において研究成果の副次的効果が見られる。

① 研究成果の大規模災害(東日本大震災)後の復興事業への適用

庄司匡宏らは、発展途上国援助の一環としてソーシャル・ビジネスに関するグローバル研究を行っているが、その成果に基づき、ソーシャル・ビジネスモデルを東日本大震災等の大規模災害後の復興事業へも適用する可能性を検討している。

② 研究成果の「街おこし」(成城商店街)への適用

境新一らは、グローバル研究の一環として世田谷商店街の「街おこし」に関するシンポジウムを企画・開催したが、その後、地元商店街の人たちと協力し成城の街おこしに取り組みつつある。

③ 研究成果の大学教育(人材育成)への還元

グローバル研究プロジェクトの成果の一つは、グローバル化とローカル化は同時かつ相互に影響を及ぼしながら進行することをさまざまな文脈で実証したことにある。このことを大学の人材育成の文脈に当てはめ、成城大学大学院文学研究科(日本常民文化専攻)では、海外で活躍する「グローバル人材」だけでなく、海外(グローバル)からの「客人」を日本に迎え入れたり、海外(グローバル)と日本(ローカル)の間を媒介するメディアーターないしコーディネーターとしての「グローバル人材」の育成を教育目的に掲げている。今後、大学学部教育等においても「グローバル人材」の育成が本学の教育目的の一つなることが期待される。

④ 研究成果の大学院入試制度への適用

研究成果の一部を大学院(文学研究科日本常民文化専攻)の入試制度に適用し、海外

法人番号	131036
プロジェクト番号	S1101012

指定校推薦入試制度の導入を計画し、準備を進めている。

⑤研究職・専門職人材の養成

本プロジェクトの実施に伴い、研究拠点であるグローバル研究センターに毎年度、PD（博士研究員）を1名、RA（リサーチアシスタント）を3～5名採用している。その内、PD1名（本学文学研究科博士課程単位取得退学者）、RA2名（本学経済学研究科博士後期課程在学者、本学法学研究科博士後期課程在学者）の3名が、PD・RA 就任時ないし離任直後に博士号を取得した。

⑥研究成果の一般社会への還元

研究拠点のグローバル研究センターは、研究成果の一部を教育に還元するものとして、平成24年度[2012年度]～平成26年度[平成2014年度]から、協力講座、「成城学II—成城から世界を見直す—グローバル研究という試み」を開講している（平成25年度も継続）。今後、研究成果を一般社会へ還元するものとして、大学が運営しているコミュニティカレッジでもこの種の講座を開講することが検討されている。

⑦研究成果の国際社会への還元

グローバル研究の理論や研究成果にも基づいて、平29年（2017年）6月に、ユネスコ・アジア太平洋無形文化遺産センターとの共催で、無形文化遺産をめぐるグローバル化に関する国際シンポジウムを開催する予定である。また、この国際シンポジウムに先立ち、平29年（2017年）2月にはグローバル研究センター主催のプレ・シンポジウムを開催する。

12 キーワード（当該研究内容をよく表していると思われるものを8項目以内で記載してください。）

- |             |            |           |
|-------------|------------|-----------|
| (1) グローカル研究 | (2) グローバル化 | (3) ローカル化 |
| (4) グローカル化  | (5) 未来社会   | (6) 複数性社会 |
| (7) 社会      | (8) 文化     |           |

13 研究発表の状況（研究論文等公表状況。印刷中も含む。）

上記、11(4)に記載した研究成果に対応するものには\*を付すこと。

<雑誌論文>

- 1 西原和久 2016 《Après le tremblement de terre au Japon: la mission transnationale de la sociologie》 Socio: revue des Editions de la Maison des sciences de l'homme Vol.5 pp.65-79 査読あり
- 2 松崎憲三 2016 「生き甲斐と幸せな死、来世への祈り～生命観の変化を踏まえて～」『日本常民文化紀要』31 輯 1-35 頁 査読あり
- 3 相原章 2015 「「社会規範的」行動と「市場規範的」行動: 弱参照点の効果」『成城大学 経済研究』第210号 139-162 頁 査読あり
- 4 矢澤修次郎 2015 「グローバル化時代の社会運動—グローバルとローカル、精神とコミュニケーションの弁証法」野宮大志郎・西城戸誠編『サミット・プロテスト: グローバル化時代の社会運動』新泉社 302-321 頁 査読なし
- 5 俵木悟 2015 「「護るべきもの」から学ぶべきこと—民俗芸能研究のフロンティアとしての無形文化遺産」『民俗芸能研究』第57号 56-75 頁 査読あり

法人番号	131036
プロジェクト番号	S1101012

- 6 岩崎尚人 2014 「グローバリゼーションの新潮流」『成城経済研究』206号 1-34頁 査読あり
- 7 東谷護 2014 「ポピュラー音楽にみる「アメリカ」—日韓の米軍クラブにおける音楽実践の比較から考える—」『グローバル研究』第1巻 43-60頁 査読あり
- 8 庄司匡宏 2014 The Role of Infrastructure in Mitigating Poverty Dynamics: The Case of an Irrigation Project in Sri Lanka, The B.E. Journal of Economic Analysis and Policy pp. 1117-1144 査読あり
- 9 北山研二 2014 «5. Flou & net : Film de Beckett» LES FRONTIÈRES DU FLOU AU CINEMA, Sous la direction de Pascal Martin & François Soulages, «Collection : Eidos Série Retina», L'Harmattan pp.71-80 査読あり
- 10 岩田一正 2012 「1930年前後の学校紛擾に見られる大学の共同体化への希求—早稲田大学同盟休校を中心に—」『成城文藝』第218号 65-84頁 査読あり
- 11 小島孝夫 2012 「柳田國男の歴史認識をめぐって—日本民俗学が超克すべき課題—」『日本民俗学』第271号 120-124頁 査読あり
- 12 俵木悟 2012 「文化財／文化遺産をめぐる重層的な関係と、民俗学の可能性」『東洋文化』第93号 177-197頁 査読あり
- 13 木畑洋一 2012 「帝国の総力戦」としての第一次世界大戦」メトロポリタン史学会編『20世紀の戦争—その歴史的位相』有志舎 26-64頁 査読なし

<図書>

- \*1 上杉富之(編)『社会接触のグローバル研究』、成城大学グローバル研究センター、全198頁、2016年3月刊。
- \*2 岩田一正・阿部勘一(編)『グローバル時代に見られる地域社会・文化創造の様相』、\*3 成城大学グローバル研究センター、全212頁、2016年3月刊。
- \*3 岩崎尚人(編)『経済社会動態のグローバル研究』、成城大学グローバル研究センター、全104頁、2016年3月刊。
- \*4 北山研二編(編)『文化表象のグローバル研究』、成城大学グローバル研究センター、全308頁、2016年3月刊。
- \*5 小澤正人(編)『歴史認識のグローバル研究』、成城大学グローバル研究センター、全148頁、2016年3月刊。
- \*6 Tomiyuki Uesugi and Matori Yamamoto(eds.), *The Perspective of Glocalization: Addressing the Changing Society and Culture under Glocalization*, Tokyo: Center for Glocal Studies, Seijo University, 172p., 2016.
- \*7 川田牧人他『二つのミンゾク学から世界民俗学、そしてその先: グローカルでローカルで複数のフォークロア研究へ』、成城大学グローバル研究センター、全78頁、2016年刊。
- \*8 東谷護他(編)『グローバル研究』No. 3、成城大学グローバル研究センター、全60頁、2016年3月刊。
- \*9 Wesley Ueunten, Transcribed and Compiled by Yoko Tsukuda, *Critically Examining "World Uchinanchu" Discourse: Identity Consciousness among Overseas Okinawan Immigrants and Their Descendants*, Tokyo: Center for Glocal Studies, Seijo University, 64p., 2015.
- \*10 北山研二・木下誠・松川祐子(編), *Orientalism at the Turn into the Twentieth Century: Cultural Representations and Glocal Studies*, Tokyo: Center for Glocal Studies, Seijo University, 53 p., 2015.

法人番号	131036
プロジェクト番号	S1101012

- \*11 東谷護他(編)『グローバル研究』No. 2、成城大学グローバル研究センター、全 124 頁、2015 年 3 月刊。
- \*12 ポール・フレデリクソン『多文化社会日本における異文化間教育の実態と可能性—岐阜県高山市を例として—』*The Condition and Potential of Intercultural Education in a Japanese Rural Municipality: Takayama City, Gifu Prefecture*、成城大学グローバル研究センター、全 58 頁、2014 年 10 月刊。
- \*13 境新一(編)『東日本大震災後のコミュニティとその変革—商店街、まちづくり、芸術の視点からの検証—』、成城大学グローバル研究センター、全 116 頁、2014 年 7 月刊。
- \*14 東谷護(編)『日本のポピュラー音楽をどうとらえるか 3—文化装置としての東アジア—』、成城大学グローバル研究センター、全 115 頁、2014 年 7 月刊。
- \*15 東谷護他(編)『グローバル研究』No. 1、成城大学グローバル研究センター、全 82 頁、2014 年 3 月刊。
- \*16 Michael Kuhn and Shujiro Yazawa(eds.), *Theories about and Strategies against Hegemonic Social Sciences*, Tokyo: Center for Glocal Studies, Seijo University, ii+218p., 2013.
- \*17 庄司匡宏(編)『ソーシャル・ビジネスは東北被災地に何をもたらすか? —バングラデシュを事例としたグローバル研究からの考察—』、成城大学グローバル研究センター、全 67 頁、2013 年 10 月刊。
- \*18 北山研二(編)『文化表象のグローバル研究 —研究成果中間報告—』、成城大学グローバル研究センター、全 219 頁、2014 年 3 月刊。
- \*19 庄司匡宏(編)『グローバル社会の変動に関する経済学的接近』、成城大学グローバル研究センター、全 33 頁、2013 年 3 月刊。
- \*20 Dennis Riches (Transcribed and Edited), *Atrocity in Slow and Fast Motion: The Nuclear Age and the Rwandan Genocide*, Tokyo: Center for Glocal Studies, Seijo University, 42 p., 2014.
- \*21 Jesús Arroyo A. y David Rodríguez A., Antonio Mackintosh R., Salvador Carrillo R., Taku Okabe, *Desafíos y Alternativas para la Globalización: Caso de México*, Tokyo: Center for Glocal Studies, Seijo University, 134 p., 2013.
- \*22 東谷護(編)『日本のポピュラー音楽をどうとらえるか 2—ローカルからグローバルへの逆照射—』、成城大学グローバル研究センター、全 151 頁、2013 年 9 月刊。
- \*23 東谷護(編)『日本のポピュラー音楽をどうとらえるか—グローバルとローカルの相克—』、成城大学グローバル研究センター、全 123 頁、2012 年 7 月刊。
- \*24 Dane Kennedy, *Indigenous Intermediaries in the Exploration of Africa and Australia*, Tokyo: Center for Glocal Studies, Seijo University, 50 p., 2012.
- \*25 東谷護(編)『地域共同体の文化実践とポピュラー文化の関係性—岐阜県東濃地区の文化実践を事例に—』、成城大学グローバル研究センター、全 45 頁、2012 年 7 月刊。
- \*26 Gergana R. Petkova, *Promotion and Reception of Japanese Culture in Bulgaria*, Tokyo: Center for Glocal Studies, Seijo University, 29 p., 2012.
- 27 増淵敏之 『物語を旅するひとびとⅡ—ご当地ソングの歩き方』、彩流社、全 214 頁、2012 年刊

法人番号	131036
プロジェクト番号	S1101012

<学会発表>

矢澤修次郎 2015 The Dynamism and Actors of Urban Development in the Age of Globalization: Lessons from History of Silicon Valley, International Conference on Social Governance in Metropolises and the Construction of Global Cities, Organized by Shanghai University, School of Sociology and Political Science and Center of Cooperative Innovation for Social, 2015年1月

上杉富之 2013 Reworking Culture, Identity, and Community: UNESCO Intangible Cultural Heritage in a Glocal Context. The 17th World Congress of the IUAES (International Union of Anthropological and Ethnological Sciences) University of Manchester 2013年8月

西原和久 2012 Foreign Residents and the Problem of Transnational Supports in the East Japan Great Earthquake: Lessons from 3.11. Disaster, The 2nd Research Seminar of Social Development in East Asia, Shanton Industrial Commercial University in Yentai 2012年6月

上杉富之 2011 Reworking Culture in a Glocal Context: Cooperative Redefinition of Haenyeo/Ama Female Fisher-Diver Culture for Nomintation for the UNESCO Intangible Cultural Heritage in Korea and Japan. the 2nd IAAPS Annual Conference/AJJ Annual Meeting, entitled Change in the Asia Pacific Ritsumeikan Asia Pacific University 2011年11月

<研究成果の公開状況>(上記以外)

シンポジウム・学会等の実施状況、インターネットでの公開状況等

<既に実施しているもの>

1 【研究会】杉本良夫(ラトローブ大学名誉教授), 「反ユーロセントリズムの落とし穴」, 成城大学3号館3階小会議室, 2015年4月13日開催。

\*2 【学会】(AJJ) Anthropology of Japan in Japan, 「日本研究をグローバル化する—内と外からする日本研究の接合—」, 成城大学3号館311, 312, 321, 322教室, 2015年4月25-26日開催。

3 【シンポジウム】菅谷亮介他, 「経済成長の中で見える無視できない問題~持続可能な成長とは?~」, 成城大学7号館732教室, 2015年5月29日開催。

\*4 【学会】IFSSO, *Glocalization: A Social Design for the Creation of Multicultural Society*, 成城大学311, 312教室, 大・小会議室, 2015年5月29-31日開催。

5 【講演会】Guthanna Siorai, 「詩人W・B・イェイツ生誕150周年記念 Everlasting Voices/Guthanna Siorai パフォーマンス『永遠の声』」, 成城大学7号館007教室, 2015年6月15日開催。

6 【研究会】岩渕功一(オーストラリア・モナシュ大学教授), 「文化の「動体視」—越境する文化を越境しながら視る—」, 成城大学3号館3階大会議室, 2015年6月20日開催。

7 【研究会】北村卓教授(大阪大学言語文化研究科・文学研究科教授), 「グローバル現象としてのボードレール受容—文学からマンガまで」, 成城大学3号館3階小会



法人番号	131036
プロジェクト番号	S1101012

議室, 2015年7月10日開催。

- 8 【研究会】 柏木隆雄 (大手前大学学長), 「三好達治におけるグローバル」, 成城大学2号館24室, 2015年10月9日開催。
- 9 【研究会】 荒木善太 (青山学院大学教授), 「化粧部屋をめぐる顛末-グローバルの視点から見たグレトリとポーマルシェー」, 成城大学3号館32K, 2015年10月23日開催。
- 10 【講演会・ワークショップ】 謝立中 (北京大学教授) 他, 「現代中国における市場変容のグローバル分析—社会学の視点から」, 成城大学3号館3階 大会議室, 2015年11月13日開催。
- 11 【学会】 「第13回東アジア社会学者ネットワーク会議社会学の国際化—そのグローバルな展開と大学の役割」, 横浜国立大学, 2015年11月14-15日開催。
- 12 【講演会】 寺島英弥, 「東日本大震災を報道する—現地における／現地を超える取材・報道・課題」, 成城大学3号館3階大会議室, 2015年12月26日開催。
- 13 【公開国際ワークショップ】 Dr. Ratana Tosakul (Associate Professor, Thammasat University, Thailand), Dr. Dixon H. W. Wong (The University of Hong Kong, China), Kim Ik Ki (Professor, Dongguk University, Korea), Kazuhisa Nishihara (Professor, Seijo University, Japan), Multicultural Academic Cooperation in a Glocal Context: Thailand, China, Korea and Japan, 成城大学3号館大会議室, 2014年5月17日開催。
- 14 【レクチュアシリーズ】 David Henningson, *The Glocal Impacts of the Uranium Trade: A film screening and guest lecture by documentary filmmaker*, 成城大学図書館AVホール, 2014年7月10日開催。
- \*15 【Thinkshop】 Organizer: World Social Sciences and Humanities Network (WWSH Net), and Center for Glocal Studies (CGS), Seijo University, *Global Social Thought and Academic Practices in the Social Sciences*, 成城大学2号館会議室, 2014年10月4日。
- 16 【研究会】 瀧川美生 (成城大学大学院文学研究科美学美術史専攻博士課程後期在籍), 「グローバル都市イスタンブルを表象するオスマン帝国期モスクとハギア・ソフィア大聖堂について」, 成城大学3号館小会議室, 2014年10月10日開催。
- 17 【研究会】 アルノ・ナンタ (フランス国立科学研究センター准教授・東京日仏会館研究員), 「植民地期の『朝鮮史』研究と解放後の歴史学による批判」, 成城大学3号館小会議室, 2014年10月24日開催。
- 18 【ワークショップ】 Organizer: Center for Glocal Studies (CGS), Seijo University, *Responding to Globalization, Localization and Glocalization*, 成城大学3号館小会議室, 2014年10月10日開催。
- 19 【レクチュアシリーズ】 Wesley Ueunten (Associate Professor, San Francisco State University), *Critical Examining 'World Uchinanchu' Discourse* (「世界のウチナンチュ」言説の批判的検証), 成城大学7号館715教室, 2014年11月14日開催。
- 20 【講演会】 ナヒード・ニクザック 「『朝には千の薔薇を』: イランの日常生活とペルシア文学・音楽」, 成城大学7号館007教室, 2014年11月19日開催。
- 21 【研究会】 大田信良 (東京学芸大学教授), 「サイドのオリエンタリズム論と冷戦期アメリカのリベラル・イデオロギー」, 成城大学3号館小会議室, 2014年11

法人番号	131036
プロジェクト番号	S1101012

- 月 21 日開催。
- 22 【レクチュアシリーズ】イアン・トーマス・アッシュ (映画監督), 「『-1287』特別先行試写会」, 成城大学図書館 AV ホール, 2014 年 12 月 4 日開催。
- 23 【Colloquium】Muhammad Reza Zaini (Research Assistant, Dept. of sociology, The University of Indonesia), *Am I Indonesian?: The Significance of Being Chinese in a Contemporary Urban Community in Tangerang, Indonesia*, 成城大学 3 号館小会議室, 2014 年 12 月 6 日開催。
- 24 【研究会】孫江 (南京大学教授), 「移動・文化遭遇-中国文明西方起源説および東アジアへの伝播-」, 成城大学 3 号館小会議室, 2015 年 1 月 29 日開催。
- \* 25 【国際研究集会】Organizer: Center for Glocal Studies (CGS), Seijo University; Sponsor: International Federation of Social Science Organizations (IFSSO), *Glocal Studies in East Asia: Mobility, Contact and Conviviality*, 成城大学 3 号館大会議室, 2013 年 5 月 11 日開催。
- 26 【講演会】Richard Flavin (東北芸術工科大学工芸コーステキスタイル科特別講師), 「The Lure of Washi アメリカ人芸術家が語る和紙の魅力」, 成城大学 3 号館 322 教室, 2013 年 6 月 3 日開催。
- 27 【講演会】Robert Jacobs (Associate Professor, Hiroshima City University), *American Nuclear Discourse: Narratives and Counter-narratives*, 成城大学 7 号館 007 教室, 2013 年 6 月 29 日開催。
- 28 【講演会】Elena Tajima Creef (Associate Professor, Wellesley College), *Looking at World War II Japanese War Brides: Lessons on How to Read a Family Photograph Album*, 成城大学 3 号館 321 教室, 2013 年 7 月 5 日開催。
- \* 29 【シンポジウム】岩崎尚人他, 「アジアにおけるグローカリゼーションの実相—経済社会動態の視点から—」, 成城大学 3 号館大会議室, 2013 年 7 月 6 日開催。
- \* 30 【シンポジウム】Dominique Chateau (l'Université Paris 1 Panthéon-Sorbonne) et al., *Orientalism at the Turn into the Twentieth Century: Cultural Representations and Glocal Studies*, 成城大学 7 号館 716 教室, 2013 年 11 月 9 日開催。
- \* 31 【国際研究集会】Sponsor: Center for Glocal Studies (CGS), Seijo University; Asian Forum for Social Research and Practice (AFSRP): Tokyo Office; The Local Organization Committee of IFSSO Tokyo Conference; Co-Sponsor: Sugiman Research Fund in Kyoto University, *Intersection of Glocal Studies and Multicultural Society: Social Scientific Approach to Social Environment Design in North East Asia*, 成城大学 3 号館大会議室, 2013 年 12 月 7 日-8 日開催。
- 32 【講演会】Yves Kamuronsi (Deputy Director of Aegis Trust & Kigali Genocide Memorial Centre), *Rwanda: 20 Years After Genocide*, 成城大学 3 号館大会議室, 2013 年 12 月 10 日開催。
- \* 33 【シンポジウム】陳培豊 (台湾中央研究院)、東谷護 (成城大学文芸学部准教授) 他, 「日本のポピュラー音楽をどうとらえるか 3 —文化装置としての東アジア—」, 成城大学 3 号館 311 教室, 2014 年 1 月 25 日開催。
- 34 【研究会】小川万海子 (元外務省職員), 「19 世紀ポーランド文学・美術と“豊穡の地”ウクライナ」, 成城大学 3 号館小会議室, 2014 年 1 月 30 日開催。
- 35 【研究会】Yoko Tsukuda (Lecturer, Seijo University) and Ratana Tosakul

法人番号	131036
プロジェクト番号	S1101012

(Associate Professor, Thammasat University, Thailand), *Transnational Migrants and Transnational Brides: Japanese Migrants and Thai Brides in a Glocal Context*, 成城大学 3 号館小会議室, 2014 年 3 月 13 日開催。

- \* 36 【International Thinkshop】Organizer: Calouste Gulbenkian Foundation and Center for Glocal Studies (CGS), Seijo University, *Theories about and Strategies against Hegemonic Social Sciences*, 成城大学 3 号館 3 階大会議室, 2012 年 5 月 12-13 日開催。
- 37 【講演会】平川祐弘 (東京大学名誉教授), 「聖書とガス室」, 成城大学 3 号館 3 階小会議室, 2012 年 5 月 24 日開催。
- 38 【講演会】VIKAS SWARUP (インドの外交官・小説家/代表作『スラムドッグ\$ミリオネア』など), *A Passage to India: Stories, Movies & More*, 成城大学 3 号館 2 階 321 教室, 2012 年 7 月 6 日開催。
- \* 39 【シンポジウム】高木昌史 (成城大学文芸学部教授) 他, 「国際化の中の柳田國男 『遠野物語』 —以前/以後—」, 成城大学 3 号館 2 階 322 教室, 2012 年 7 月 28 日開催。
- 40 【公開対談・朗読会】Anne Cherian, *What it Means to be an Ethnic Writer in the United States: A Public Conversation with Anne Cherian, with Readings from her Novels, A Good Indian Wife (2008) and The Invitation (2012)*, 成城大学 3 号館 3 階大会議室, 2012 年 8 月 2 日開催。
- \* 41 【シンポジウム】庄司匡宏 (成城大学経済学部准教授) 他, 「ソーシャル・ビジネスは東北被災地に何をもたらすか? バングラデシュを事例としたグローバル研究からの考察」, 成城大学 3 号館 3 階大会議室, 2012 年 10 月 6 日開催。
- 42 【公開国際セミナー】Jesús Arroyo Alejandro (Profesor Investigador Titular “C”, Universidad de Guadalajara) et al., *Desafíos y Alternativas para la Globalización -Caso de México-*, 成城大学 7 号館 1 階 712 教室, 2012 年 11 月 17 日開催。
- \* 43 【公開シンポジウム】境新一 (成城大学教授) 他, 「東日本大震災後のコミュニティとその変革—商店街, まちづくり, 芸術からの検証—」, 成城大学 3 号館 003 教室, 2012 年 11 月 18 日開催。
- 44 【特別講演会】ヘスス・アロージョ、大隈宏他, *Emerging Power Mexico: Past, Present and Future*, 成城大学図書館 AV ホール, 2012 年 11 月 19 日開催。
- 45 【研究会】(講演) 長畑明利 (名古屋大学国際言語文化研究科教授), (コメンテーター) 有田英也 (成城大学文芸学部教授), 「アジア系アメリカ人詩人による言語実験とアイデンティティ—テレサ・ハッキョン・チャとミュンミ・キムを中心に—」, 成城大学 3 号館 3 階小会議室, 2012 年 11 月 30 日開催。
- 46 【講演会】Philippa Levine (現在テキサス大学オースティン校教授、北米イギリス研究会議議長), *Nakedness, Colonialism and Spectacle*, 成城大学 3 号館 3 階大会議室, 2012 年 12 月 15 日開催。
- \* 47 【シンポジウム】東谷護 (成城大学文芸学部准教授) 他, 「日本のポピュラー音楽をどうとらえるか 2 — ローカルからグローバルへの逆照射 —」, 成城大学 3 号館 1 階 311 教室, 2013 年 1 月 26 日開催。
- 48 【講演会】矢澤修次郎 (成城大学社会イノベーション学部教授), 「グローバル研究の可能性—社会学の立場から—」, 成城大学 3 号館 3 階大会議室, 2013 年 2 月

法人番号	131036
プロジェクト番号	S1101012

26 日開催。

- 49 【講演会】 Gergana R. Petkova (Sofia University), *Japanese Culture in Bulgaria: Education and Reception*, 成城大学 3 号館大会議室, 2011 年 7 月 28 日開催。
- 50 【ワークショップ】 上杉富之他「グローバル研究のめざすもの—具体化を通じた理論と方法の検討—」成城大学 3 号館小会議室, 2011 年 7 月 30 日開催。
- 51 【講演会】 Gaye Rowley (早稲田大学教授), 「Truth or Fiction (和歌の「真実」と「事実」を探る)」, 成城大学 3 号館 322 教室, 2011 年 10 月 17 日開催。
- 52 【研究会】 荒木正純 (白百合女子大学教授・筑波大学名誉教授), 「日本のオランウータン表象誌—芥川「猩々の養育院」を手がかりに—」, 成城大学 3 号館小会議室, 2011 年 11 月 10 日開催。
- 53 【公開授業】 Edward J. W. Park (Professor and Director, Asian Pacific American Studies Program, Loyola Marymount University, USA), *Los Angeles as a Global Crossroad*, 成城大学 235 教室, 2011 年 12 月 2 日開催。
- 54 【セミナー】 Edward J. W. Park (Professor and Director, Asian Pacific American Studies Program, Loyola Marymount University, USA), *U. S. immigration Law and Policy*, 成城大学 5 号館会議室, 2011 年 12 月 2 日開催。
- 55 【講演会】 Edward J. W. Park (Professor and Director, Asian Pacific American Studies Program, Loyola Marymount University, USA), 「世界市民から地域住民へ」成城大学 3 号館大会議室, 2011 年 12 月 3 日開催。
- 56 【ワークショップ】 岩田一正他「コミュニティ概念の擦り合わせ」成城大学 3 号館 32G 教室, 2011 年 12 月 3 日開催。
- 57 【研究会】 長谷川晶子 (白百合女子大学・明治学院大学・広島大学講師), 「グローバル現象としてのシュルレアリスム」成城大学 3 号館小会議室, 2012 年 1 月 20 日開催。
- 58 【ワークショップ】 上杉富之他「社会接触のグローバル研究—グローバル研究構想との関連から—」成城大学 3 号館 32H 教室, 2012 年 1 月 23 日開催。
- \* 59 【シンポジウム】 永原宣 (マサチューセッツ工科大学)、東谷護 (成城大学文芸学部准教授) 他, 「日本のポピュラー音楽をどうとらえるか」成城大学 3 号館 311 教室, 2012 年 1 月 28 日。
- \* 60 【ワークショップ】 庄司匡宏 (成城大学経済学部准教授) 他, 「グローバル社会の変動に関する経済学的接近」, 成城大学 3 号館 32A 教室, 2012 年 3 月 15 日 開催。
- 61 【講演会】 Dane Kennedy (Professor, The George Washington University), 「アフリカ・オーストラリア探検における現地仲介者たち」成城大学 3 号館大会議室, 2012 年 3 月 15 日 開催。
- <これから実施する予定のもの>

#### 14 その他の研究成果等

特になし

法人番号	131036
プロジェクト番号	S1101012

## 15 「選定時」及び「中間評価時」に付された留意事項及び対応

＜「選定時」に付された留意事項＞

採択結果の「別紙」に記された「審査時に付された意見又は留意事項」  
「研究計画が漠然としており、以前の研究とは、拠点のセンターおよび研究資料室を新設する点で異なるが、そのテーマは近似しているので、異動を明確に説明されたい」

＜「選定時」に付された留意事項への対応＞

採択後の平成 23 年 7 月 30 日にプロジェクトの全体会議、「グローバル研究のめざすもの—具体化を通じた理論と方法の検討」をワークショップ形式で開催し、そこにおいて、「選定時に付された留意事項」を示し、プロジェクトメンバー全員で対応策を検討した。その際、まず、「選定時に付された留意点」が大きく分けて2つの問題、すなわち、1)研究計画が漠然としていることと、2)前回採択された研究(平成 20 年度～平成 22 年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「グローバル化時代に再編する日本の社会・文化に関する地域・領域横断的研究」との異動・差異が明確でないことの2点に集約されることを確認した。その上で、会議では、上記の2点を中心にして対応策を検討した。その結果、各問題点について、以下のような対応策を講じることとした。その後、それらの対応策に基づく研究活動を現在に至るまで継続的に実施し、当初の不備を糺すだけでなく、各対応策の欄に記したような多大な成果をあげつつある。

(1)研究計画が漠然としていることへの対応

＜対応策＞

プロジェクト全体の研究計画及び各研究チームの研究計画について、プロジェクトを構成する6つの研究チーム(「理論研究」、「社会接触」、「コミュニティ再編」、「経済社会動態」、「文化表象」、及び「歴史認識」)ごとにより具体的かつ詳細な年次計画を立案する。

＜成果＞

年度ごとに詳細な年次計画を立案し、それに基づいて各研究チームが具体的な研究を進めている。

(2)前回の研究との異動・差異が明確でないことへの対応

以下の3つの点で、前回の研究との差異を明確にする。

①研究対象分野の拡大

＜対応策＞

前回の研究は、学内附置機関である民俗学研究所のもとでのグローバル研究センター研究プロジェクトとして実施したことから、研究対象分野が民俗学や文化人類学、日本史学、東洋史学(考古学)などに限定され、学内の認知度も決して高いとはいえなかった。これに対し、今回の研究は前回の研究成果が評価されたことによる内での認知度が一気に高まり、研究対象分野を大幅に拡大し、文化社会学や英米文学、国際関係論、西洋史学、法学、経済学、経営学等を含めることができた。研究対象分野の拡大をより明確に示すため、新規研究分野の研究活動、特にシンポジウムやセミナー、ワークショップの開催等を促進し、その成果を迅速に刊行している。

＜成果＞

ポピュラー音楽学や英米文学、経済・経営学等の新規分野のシンポジウムやセミナー、ワークショップを多数開催し、その成果も順次刊行して一般社会に還元している。

法人番号	131036
プロジェクト番号	S1101012

## ②研究対象地域の拡大

### <対応策>

前回の研究は、民俗学研究所付属のグローバル研究センターの研究プロジェクトとして実施したことから、研究対象地域がおおむね日本国内に限定されていた。これに対し、今回の研究は研究対象地域を大幅に拡大し、日本のみならず海外にも目を向け、日本内外のグローバル現象や過程も研究する。研究対象地域の拡大をより明確に示すため、新規研究地域のシンポジウムやセミナー、ワークショップの開催等を促進し、その成果を迅速に刊行している。

### <成果>

欧米地域やアフリカ、南アジア・東アジア・メキシコ等の新規地域を対象とする、あるいは新規地域の研究者が参加するシンポジウムやセミナー、ワークショップを多数開催し、その成果を順次刊行して一般社会に還元している。

## ③研究射程の拡大

### <対応策>

前回の研究は、「グローバル研究」を理論的に構想・提示し、実証的なグローバル研究を日本国内に限定して実際に行うことが主たる目的であった。これに対し、今回の研究の主眼の一つは、研究の射程を大幅に拡大し、グローバル研究の成果に基づいて来たるべき未来社会を「複数性社会」として構想し、その実現に向けた理論を構築することにある。研究射程の拡大とその効果をより明確に示すため、本研究では理論研究チームを設置するとともに、大学内外、日本内外の研究者を招いて「総括班」(グローバル研究センターの外部評価委員会に相当)を組織し、グローバル研究および複数性社会の理論と方法を集中的に検討、議論することとする。

### <成果>

理論研究チーム／総括班の矢澤修次郎教授らが欧米やアジア、アフリカ、南米等の研究者とともに、欧米中心の人文社会科学のあり方を是正する将来的な理論と戦略について議論してその成果を英文研究叢書として刊行するなど、未来社会の構想・提示に向けた議論を着実に展開しつつある。

## <「中間評価時」に付された留意事項>

### (1) 研究組織について(要約)

研究組織体制がやや複雑で、全体像が見えにくい。また、プロジェクト内の各研究ユニット(研究テーマチーム)の役割やシナジー効果がわかりにくい。若手研究者の採用については特に問題はない。

### (2) 研究施設・設備などについて(要約)

既存の施設を拡充して利用しており、特に問題はない。

### (3) 研究プロジェクトの進捗状況・研究成果等について(要約)

一定の成果はあがっているものの、プロジェクト全体としての成果がわかりにくい。

## <「中間評価時」に付された留意事項への対応>

### (1) 研究組織についての評価(研究組織体制がやや複雑で、全体像が見えにくい。また、プロジェクト内の各研究テーマチームの役割やシナジー効果がわかりにくい。若手研究者の採用については特に問題はない)への対応

#### <対応策>

研究組織体制を可視化する方策の一つとして研究組織図を作成し、各研究ユニット(研究テーマチーム)並びに各研究分担者の役割を明示し、研究テーマチームと研究分担者の間の協力、連携を促進する。また、研究テーマチームごとに任命しているチ

法人番号	131036
プロジェクト番号	S1101012

ームリーダーやサブリーダーからなるリーダー会議を開いて研究」テーマチーム間の連携を図る。若手研究者(大学院生並びに大学院修了者等)を引き続きRAないしPDとして採用し、大学教員等の専門的職に就く研究者を養成する。

<成果>

研究組織図を作成し、研究テーマチーム並びに各研究分担者の役割を明示し、研究テーマチームと研究分担者の間の協力、連携を促進した。電子メール等を用いた持ち回り会議並びに対面式のリーダー会議を開催して研究テーマチーム間の連携を図った。若手研究者(大学院生並びに大学院修了者等)を引き続きRAないしPDとして積極的に採用し、大学教員等の専門的職に就く研究者を養成した(平成 23 年度より毎年PDを1名、RAを3~5名採用)。

(2) 研究施設・設備などについての評価(既存の施設を拡充して利用しており、特に問題はない)への対応

<対応策>

既存の施設をさらに拡充するとともに、研究成果をより効果的かつ迅速に日本内外へ発信する方策を講じた。

<成果>

研究拠点であるグローバル研究センターを擁する成城大学ならびにその母体である成城学園のホームページの全面的な改訂に合わせて、グローバル研究センターのホームページもより見やすいものに改訂した

(<http://www.seijo.ac.jp/research/glocal-center/>参照)。

(3) 研究プロジェクトの進捗状況・研究成果等についての評価(一定の成果はあがっているものの、プロジェクト全体としての成果がわかりにくい)への対応

<対応策>

プロジェクト全体の研究成果をより明確にする方策として、1)本研究プロジェクトが依拠する「グローバル研究」の理論と方法をより精緻化し、2)プロジェクト全体の研究成果を一体化して「可視化」することとした。

<成果>

1)「グローバル研究」の理論と方法の精緻化

グローバル研究に焦点を当てた学術雑誌として『グローバル研究』(*Journal of Glocal Studies*)を、2014 年 3 月、グローバル研究センターから創刊し、継続的に刊行している。創刊号では、本研究プロジェクトの研究代表(上杉富之グローバル研究センター長)が頭論文にて改めて「グローバル研究」(glocal studies)の構想を提示するとともに、その目的や可能性を論じた(\*上杉 2014)。

2)プロジェクト全体の研究成果の「可視化」

①本研究プロジェクト代表者及び研究分担者らが「グローバル研究」の理論や理念に基づいて国際的な学会や学会分科会発表、シンポジウム等を企画、運営・開催した。上杉は「グローバル研究」の観点から、国際人類学民族学連合(IUAES: International Union of Anthropological and Ethnological Sciences)の国際会議(2014年5月15日、幕張メッセにて開催)で、*The Perspective of Glocalization: Addressing the changing Society and Culture under Globalization* と題する分科会を企画・運営した(*The Perspective of Glocalization: Addressing the changing Society and Culture under Globalization* と題してグローバル研究センターより 2016 年に刊行)。また、AJJ (Anthropology of Japan in Japan)学会の 2015 年春季大会を、*Glocalizing Japanese Studies: Connecting Japanese Studies In- and Out-of-Japan* を大会テーマとして開催

法人番号	131036
プロジェクト番号	S1101012

した(2015年4月25～26日、成城大学にて開催)。さらに、本研究プロジェクト、「社会接触のグローバル研究」チームに属する研究分担者の矢澤(修次郎)と西原(和久)は、2015年5月29-31日、国際社会科学団体連盟(International Federation of Social Science Organizations:IFSSO)の会議を *Glocalization: A Social Design for the Creation of Multicultural Society* と題して成城大学にて開催した。

②本研究プロジェクトを分担する5つの研究テーマチームがそれぞれ研究成果論文集を編み、「グローバル研究センター研究叢書」として刊行した(\*上杉編『社会接触のグローバル研究』2016年刊、岩田・阿部(編)『コミュニテフィ再編のグローバル研究』2016年刊、岩崎(編)『経済動態のグローバル研究』、北山(編)『文化表象のグローバル研究』2016年刊、小澤(編)『歴史認識のグローバル研究』2016年刊)。

以上の試みを通して、本研究プロジェクトで進めている「グローバル研究」、ないし少なくとも「グローバル化」を焦点とする研究が日本のみならず国際的にも徐々に認知され、本グローバル研究プロジェクトの研究成果も一体として評価されるものと期待する。



法人番号	131036
プロジェクト番号	S1101012

## 16 施設・装置・設備・研究費の支出状況(実績概要)

(千円)

年度・区分	支出額	内 訳						備考
		法人負担	私学助成	共同研究機関負担	受託研究等	寄付金	その他( )	
平成23年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	1,000	334	666				
	研究費	18,724	9,725	8,999				
平成24年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	1,000	334	666				
	研究費	18,723	9,742	8,981				
平成25年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	1,000	334	666				
	研究費	18,675	10,416	8,259				
平成26年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	18,722	9,980	8,742				
平成27年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	18,675	18,675	0				
総額	施設	0	0	0	0	0	0	0
	装置	0	0	0	0	0	0	0
	設備	3,000	1,002	1,998	0	0	0	0
	研究費	93,519	58,538	34,981	0	0	0	0
総計	96,519	59,540	36,979	0	0	0	0	

法人番号	131036
------	--------

## 17 施設・装置・設備の整備状況 (私学助成を受けたものはすべて記載してください。)

《施設》(私学助成を受けていないものも含め、使用している施設をすべて記載してください。) (千円)

施設の名 称	整備年度	研究施設面積	研究室等数	使用者数	事業経費	補助金額	補助主体
グローバル研究センター	平成23年度	19.00m <sup>2</sup>	1	45人	0	0	
グローバル研究センター 研究資料室	平成23年度	19.00m <sup>2</sup>	1	45人	0	0	
研究機構事務室	平成23年度	62.28m <sup>2</sup>	1	49人	0	0	

※ 私学助成による補助事業として行った新增築により、整備前と比較して増加した面積

\_\_\_\_\_ m<sup>2</sup>

《装置・設備》(私学助成を受けていないものは、主なもののみを記載してください。)

(千円)

装置・設備の名称	整備年度	型 番	台 数	稼働時間数	事業経費	補助金額	補助主体
(研究装置)				h h h h			
(研究設備)							
「グローバル研究の理論 研究に関する図書一式」	平成23年度		1セット	h h	1,000	666	私学助成
「複数性社会構築の理論 研究に関する図書一式」	平成24年度		1セット	h h	1,000	666	私学助成
「未来社会と文化の理論 研究に関する図書一式」	平成25年度		1セット	h h	1,000	666	私学助成
(情報処理関係設備)				h h h h			

## 18 研究費の支出状況

(千円)

年 度	平成 23 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消耗品費	1,393	データの整理・保存	749
光熱水費	0		
通信運搬費	172	刊行物送料	121
印刷製本費	745	研究成果刊行	451
旅費交通費	10,091	調査、資料収集	10,091
報酬・委託料	1,311	資料収集・整理、講演等謝礼	849
(その他)	5,012	図書資料費、諸税	4,786
計	18,724		
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人件費支出 (兼務職員)			
教育研究経費支出			
計	0		
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品			
図 書	1,000		
計	1,000		
研 究 ス タ ッ プ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	3,736		学内5人
ポスト・ドクター			
研究支援推進経費			
計	3,736		学内5人

法人番号	131036
------	--------

年 度	平成 24 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消耗品費	1,067	データの整理・保存	298
光熱水費	0		
通信運搬費	534	送料	439
印刷製本費	3,624	研究成果刊行	3,611
旅費交通費	5,803	調査、資料収集	5,733
報酬・委託料	3,446	資料収集・整理、講演謝礼	2,580
(その他)	4,249	図書資料費、諸税	2,809
計	18,723		
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人件費支出 (兼務職員)			
教育研究経費支出 計	0		
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品 図 書	1,000		複数性社会構築の理論研究に関する図書一式
計	1,000		
研 究 ス タ ッ プ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	2,085		学内3人
ポスト・ドクター	2,422		学内1人
研究支援推進経費 計	4,507		学内4人

年 度	平成 25 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消耗品費	1,678	PC周辺機器	847
光熱水費	0		
通信運搬費	600	刊行物送料	531
印刷製本費	1,701	研究成果刊行	1,569
旅費交通費	7,403	調査、資料収集	6,074
報酬・委託料	2,305	資料収集・整理、講演等謝礼	1,400
(その他)	4,988	図書資料費	3,566
計	18,675		
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人件費支出 (兼務職員)			
教育研究経費支出 計	0		
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品 図 書	1,000		未来社会と文化の理論研究に関する図書一式
計	1,000		
研 究 ス タ ッ プ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	2,021		学内4人
ポスト・ドクター	2,434		学内1人
研究支援推進経費 計	4,455		学内5人

法人番号

131036

年 度	平成 26 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
主 な 内 容			
教 育 研 究 経 費 支 出			
消 耗 品 費	761	PC周辺機器	385
光 熱 水 費	0		
通 信 運 搬 費	484	送料	297
印 刷 製 本 費	4,224	研究成果刊行	3,940
旅 費 交 通 費	6,408	調査、資料収集	5,521
報 酬・委 託 料	3,040	資料収集・整理、講演謝礼	631
(その他)	3,805	図書資料費、雑費	3,593
計	18,722		
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人件費支出 (兼務職員)			
教育研究経費支出 計	0		
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品 図 書			
計	0		
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	1,905		学内4人
ポスト・ドクター	2,434		学内1人
研究支援推進経費 計	4,339		学内5人

年 度	平成 27 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
主 な 内 容			
教 育 研 究 経 費 支 出			
消 耗 品 費	748	シンポジウム関連	397
光 熱 水 費	0		
通 信 運 搬 費	431	刊行物等送料	343
印 刷 製 本 費	4,513	研究成果刊行	4,507
旅 費 交 通 費	4,946	調査、資料収集	4,946
報 酬・委 託 料	2,825	資料収集・整理、講演等謝礼	2,620
(その他)	5,212	図書資料費、諸税	3,427
計	18,675		
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人件費支出 (兼務職員)			
教育研究経費支出 計	0		
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品 図 書			
計	0		
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	1,850		学内4人
ポスト・ドクター	2,432		学内1人
研究支援推進経費 計	4,282		学内5人